

協同場面における消極的発話は エンゲージメントを低下させるか

○平見真希人・藤木大介
(広島大学大学院人間社会科学研究科)

他者との協同は問題解決を促進することが知られている。多くの場合、協同による促進効果は発話を通じた相互作用によってもたらされる。

しかし、発話内容によっては協同による促進効果を十分に発揮できなくなる。例えば、平見・藤木 (2023) は協同が課題解決を促すことを示した橋・藤村 (2010) を追試し、協同するパートナーが発する課題解決に対する消極的発話 (例:「わからない」「これくらいでいいんじゃない」) を聞くことで課題解決が妨げられることを示した。

しかし、なぜ他者の消極的発話を聞くことで課題解決が妨げられるのかは明らかでない。そこで本研究では、妨害効果を生じさせる機序に関わる変数として、学習活動への意欲的な取り組みや関与のあり方を示す概念であるエンゲージメントに着目し、協同場面におけるパートナーの消極的発話が協同前後のエンゲージメントの変化に及ぼす影響を検討する。

方法

実験協力者 大学生 36 名であった。同性の友人同士でペアを組み実験に参加した。

課題及び手続き 実験協力者は「正方形を合同な図形に分ける方法を考える」という内容の事前課題に個別に 5 分間取り組んだ後、「分け方に共通するルールを見出す」という内容の協同課題にペアで 15 分間取り組んだ。そして、「正三角形を合同な図形に分ける方法を考える」という内容の転移を測る事後課題に個別に 5 分間取り組んだ。

エンゲージメントは、協同課題の前後に測定した。外山 (2018) の尺度を用いて、感情的エンゲージメント (5 項目, 例:「課題は楽しかった」), 行動的エンゲージメント (5 項目, 例:「熱心に取り組んだ」), 認知的エンゲージメント (3 項目, 例:「解き方を工夫した」) を 7 件法 (全くそう思わない: 1~非常にそう思う: 7) で測定した。

結果と考察

発話記録をもとに平見・藤木 (2023) と同様の基準で消極的発話を抽出した。エンゲージメントはそれぞれ各項目の平均を得点とした。

Table 1 消極的発話数が各エンゲージメントの変化に及ぼす影響

	感情的		行動的		認知的	
	β	p値	β	p値	β	p値
自らの消極的発話	-.206	.361	-.167	.237	-.262	.096
パートナーの消極的発話	.101	.715	-.122	.378	.050	.741
交互作用	-.288	.035	-.160	.016	-.207	.010

パートナーの消極的発話が協同前後のエンゲージメントの変化に及ぼす影響を分析するため、自らの消極的発話数、パートナーの消極的発話数、それらの交互作用を説明変数、各エンゲージメントの変化 (協同後-協同前) を目的変数にした APIM (Actor-Partner Interdependence Model) による重回帰分析を行った。その結果、いずれにおいても交互作用のみ有意であった (Table 1)。そこでパートナーの消極的発話数を調整変数とした単純傾斜検定を行ったところ、行動的エンゲージメントの変化と認知的エンゲージメントの変化において、パートナーの消極的発話数が多い場合、自らの消極的発話数が多いほどそれらのエンゲージメントが低くなること示された (順に、 $B = -0.17, p = .045$; $B = -0.40, p = .008$)。

パートナーの消極的発話が多い時に自らも消極的発話をしてしまうことで課題解決に向けた行動的、認知的関与が低下するため、パートナーの消極的発話を聞くことで課題解決が妨げられると考えられる。

付記

本研究は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2132 の支援を受けた。

引用文献

平見真希人・藤木大介 (2023). 協同場面における知識統合を妨げる発話 認知科学, 30, 193-206.
橋春菜・藤村宣之 (2010). 高校生のペアでの協同解決を通じた知識統合過程—知識を相互構築する相手としての他者の役割に着目して— 教育心理学研究, 58, 1-11.
外山美樹 (2018). 課題遂行におけるエンゲージメントがパフォーマンスに及ぼす影響—エンゲージメント尺度を作成して— 筑波大学心理学研究, 56, 13-20.